

# 認知言語学的アプローチによるスペイン語語彙学習・指導に関する新提案（その1）

——「投影」の導入——

福森雅史

## Resumen

Este tratado es intentado sugerir que una manera de estudiar por la memorización mecánica especialmente en el campo de morfología continuará produciendo los estudiantes que no puede usar las palabras españolas tan precisamente como los hablantes nativos del español. Para resolver este problema, sugerimos también la manera nueva efectiva de estudiar y enseñar las palabras españolas en el punto de vista de la lingüística cognitiva. Los ejemplos específicos que se ocupan aquí son 'cabeza de martillo', 'pata de la mesa', 'boca de botella', 'pico del botijo' y tal y cual, que pueden ser observados del punto de 'proyección'. Estos ejemplos muestra nuestra cognición por que organizamos nuestro mundo externo a través de los nombres de la parte de cuerpo, los cuales son denominados las expresiones metafóricas idiosincrásicas por George Lakoff y Mark Johnson(1988, 1999).

**Palabras claves :** 投影 (proyección), 認知言語学 (lingüística cognitiva),  
スペイン語 (lingüística cognitiva), 語彙 (vocabulario), 概念 (concepto)

## 1. はじめに

従来の理論言語学のアプローチでは、例えば Chomsky (1957) に代表されるように、人間には本来的に言葉を生成する文法能力が備わっており、言語活動はこの能力の現れに他ならないという、言語の創造性に着目した立場を執るものであった。そして、文を生み出す装置としての文法は「恣意的」(arbitrario)なものではなく「規則的」(regular)なものであると考えられていた。それ故、繰り返し適用される基本的規則の拡充に注目すれば、従来の理論言語学における言語観は文法を普遍的な規則の集合体として体系づけることが可能であるという統語理論中心の世界に収束する。また、その世界は我々人間とは切り離された客観的な真実に基づいた世界である、という考え方でもある。したがって、言語もまた、知覚経験から独立した形式と意味との関係からなる客観的記号の体系に過ぎないという言語観が主流を占めてきたことは周知の事実であろう。このような見解に対し、以下(1)では客観主義とも浪漫主義とも異なる「経験主義」という第三の立場からの言語アプローチが伺える。

- (1) We are physical beings, bounded and set off from the rest of the world by the surface of our skins, and we experience the rest of the world as outside us. Each of us is a container, with a bounding surface and an in-out orientation.

(我々は生身の肉体を持った存在であり、自身の皮膚の表面によって外部世界と接し、区切られ、そして自身の肉体内部以外の世界を外にある世界として経験している。一人ひとりの人間が皮膚を境にして、肉体の内／外の方向性を持つ、容器である。)

— Lakoff and Johnson (1980 : 29-30) (下線・日本語訳筆者)

つまり、「我々は生身の肉体を持った存在であり、自身の皮膚の表面によって外界世界と接し、区切られ、そして自身の肉体以外の世界を外にある世界として経験している」以上、その経験を通して得られた認識が言語に反映されているからこそ、「概念的意味」(以下、これを「概念」と呼ぶ)が生じ得ると言える。このように、「言語とは人間の脳活動の結果事象である」とする経験主義的立場を執るアプローチこそが「認知言語学」(Linguística Cognitiva)である。そして、認知言語学におけるこうした言語観は、例えば、下記(2)のアリストテレス哲学に示されるような哲学的見地とも直結することになる。

- (2) … 直接に経験される世界は混沌とした印象・表象の世界である。われわれの思考はこの世界のうちに秩序をみつけた。その思考内容は言葉によって表現され形を与えられる。だから、事物と言葉とは不可分である。逆に、当該の事物について語られる言語の結合を分析しさえすれば、事物の知に到達することができよう。つまり、経騷材料である事物→思考→言語→事物の知のように、認識は円環的に考えられよう。アリストテレスはこのように考え、プラトンが立言形式と関係のないアイデアという実在を認めたのとはちがって、どんな表現されない実在も認めなかった。

— 堀田 (1991 : 121) (下線筆者)

つまり、外界の事物と言葉とは不可分であり、人間の認識は「経騷材料である事物→思考→言語→事物の知」として捉えられるが、言うまでもなく、我々の誰しものが自身の認識体系としてこの「知覚－言語－人知」の密接な結びつきを保持している。それ故、自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た「経験」を基盤にした知のメカニズムをスペイン語教育に導入することは、第二言語学習者にとっては自身の馴染み深い日常経験と重なった自然な言語習得となり得ることは言を俟たない。このことを含意する記載が次の(3)である。

- (3) Yet the influence of cognitive linguistics may prove very valuable, because it lends theoretical support to a number of accepted teaching approaches in the fields of both vocabulary and grammar.

(けれども、認知言語学の影響は非常に価値のあるものであることが証明されるかもしれない。なぜなら、認知言語学は、語彙、文法の両面で受け容れられてきた多くの教

授法を理論的に支えるからである。）

— Ungerer and Schmid (1996 : 267) (下線・日本語訳筆者)

しかしながら、実際のスペイン語語彙学習指導の現状に目を向ければ、認知言語学の諸理論に基づいた種々の研究成果が第二言語習得に効果的かつ体系的に帰納されているかと言えば、(特に‘what to teach’ (qué enseñar) の側面において) その限りではないように感じられる。例えば、以下(4)に見られるように、

- (4) 認知情報処理のシステムをできる限り調べ、その働きにあった教授・学習方法を導入することで、外国語習得を支援していくしか有効な選択肢はない。具体的な方法としては、加齢によってもあまり退化しない条件づけを用いたり、反復練習を重要視したり、短期記憶に負担をかけないよう配慮をしたり、注意資源の適正配分を心がけたり、音声化や自動的処理のメカニズムを利用したり、あるいは、スキーマの活性化を促進したり、などが考えられる。

— 竹内（編）（2000 : 140）（下線筆者）

現状では、「条件づけ」や「反復練習」といった‘how to teach’ (cómo enseñar) の側面には多分に光が当てられている反面、‘what to teach’ (qué enseñar) という側面には「意味概念」を生み出す大脳内活動（以下「認知メカニズム」と呼ぶ）を明らかにして言語教育の向上に還元する視点は乏しいように感じられる。また、第二言語の四技能 (leer, escribir, hablar y oír) を育成するためには、通常、言語における最小単位となる「語」(cf. 上野 (1955 : 1)) の意味を論理的に学習指導することが必要であると考えられるが、この語彙概念の学習指導という点では、「スペイン語表現 = 日本語訳」の形で機械的に覚えていくことが正しい単語習得の方法であるというような学習指導が主流を占めているように感じられてならない。下記(5a - b)がその実例である。

- (5) a. boca [ボ・カ] 女口 :

Se queda con la boca abierta.

彼は口をポカンと開ける。

boca abajo [arriba] うつぶせ [あお向け] に :

Está acostado boca abajo.

彼はうつぶせに横たわっている。

— 高橋 (2006 : 33)

- b. cabeza [カ・ベ・サ] 女 ① 頭 ; 頭脳 :

Me duele la cabeza.

私は頭が痛い。

Este perro tiene Buena cabeza.

この犬は頭がいい。

② 先頭, トップ :

Estamos a la cabeza de Europa.

私たちはヨーロッパでトップである。

— 高橋 (2006 : 36)

そして、筆者の経験も交えると、このような（日本語訳の機械的）詰め込み式学習が偏重され

ている学習指導法には次の(6a-c)のような問題点が存在する。

- (6) a. スペイン語の綴りと辞書に記載されている日本語訳とをイコール(=)で結んで機械的に覚えていくことが正しい単語習得方法であるとするならば、「日本語訳の機械的な丸暗記が得意な人ほどスペイン語が得意である」ということになってしまう。これは、裏を返せば、「日本語訳の機械的な丸暗記が苦手な学習者にとって大きな問題である」ということである。
- b. 暗記力に自信を持っている人たちでさえ、しばらく時間が経てば、丸暗記をしていた単語やその日本語訳を忘れてしまう。
- c. 特に、一つの単語が複数の異なる日本語訳を有している多義語の場合、その日本語訳の数に応じて記憶の負担は比例して大きくなる。

こうした問題点を解決するためには、まず、'how to teach' (cómo enseñar) の側面ばかりでなく、「学習者が具体的な学習対象そのものを如何にして捉えるべきか?」といった 'what to teach' (qué enseñar) の側面にも光を当てる必要がある。

例えば、筆者は「暗記方法の違いとその記憶の定着度」に関して以下(7)のような実験を行った。

- (7) a. 日時：2009年4月13日(1回目)、5月18日(2回目)、6月22日(3回目)
- b. 場所：立命館大学 諒友館 833 教室および清心館 533 教室
- c. 対象者：日本語を母語とする立命館大学のスペイン語初習学習者 73 名  
(うち、Aグループ：「専門スペイン語Ⅰ」の受講者 25 名、Bグループ：「スペイン語と文化Ⅰ」の受講者 48 名)  
ただし、Aグループは1回目と2回目、Bグループは1回目～3回目の実験全てに参加したのもののみを実験対象とし、いずれかの授業を欠席していたものに関しては対象外とする。
- d. 設問：「駐車禁止」を表す道路標識は以下 A、B のどちらか？



- e. 実験方法：
- ① 対象者 73 名を A (「専門スペイン語Ⅰ」の受講者 25 名)、B (「スペイン語と文化Ⅰ」の受講者 48 名) の 2 グループに分ける。
  - ② 両グループとも 1 回目の設問をする。
  - ③ A グループには解答と共に、「A が正解なのは、この『駐車禁止』のマークは No Parking の No の N と O とを組み合わせて作られた図形だから」という、「な

ぜその解答が正解なのか？」の説明も行なう。他方、Bグループには解答のみを伝え、「なぜその解答が正解なのか？」の説明は行なわない。

- ④ 両グループとも、再度同じ設問を行なうことは告げず、1回目から約1ヵ月後に2回目の設問を行なう。
- ⑤ 2回目の設問をした後、Bグループには解答と共に、「なぜその解答が正解なのか？」の説明を行なう。
- ⑥ Bグループのみ、再再度同じ設問を行なうことは告げず、2回目から約1ヵ月後に3回目の設問を行なう。

f. 結果：

- ① 1回目の設問の正答率。  
Aグループ：44%（11 / 25 人正解）  
Bグループ：44%（21 / 48 人正解）
- ② 2回目の設問の正答率。  
Aグループ：100%（25 / 25 人正解）  
Bグループ：54%（26 / 48 人正解）
- ③ 3回目の設問の正答率。  
Bグループ：98%（47 / 48 人正解）

上記（7f）を見ても明らかなように、ただ漠然と丸記憶するだけでは、記憶は定着しにくいのに対し、「なぜその解答が正解なのか？」という理由付けを合わせて指導することで、記憶の定着度はかなり増すと言える。実際に、この説明を行なった後、数人の学生から以下（8a-c）のような意見を聞いた。

- (8) a 説明を聞いていない時は当てずっぽうだったけど、説明を聞いたらもう忘れなくなりました。
- b. 同じ問題をやったのはわかってたけど、どっちが正解なのか全く覚えてなかった。あの時にも解答を聞いたはずなのに…。でも、3回目と同じ問題が出た時には簡単にわかりました。頭ごなしに丸暗記するんじゃなくて、「何でか？」っていうのを一緒に覚えるのがこんなに大切だとは思いませんでした。
- c. めっちゃ面白かったです。標識一つにもあんな秘密があったんですね～。今度、友達にも教えてやります。
- d. 僕は記憶力があんまり良い方じゃないんですけど、これは忘れないですね。今度から、何か覚えないうけない時には、出来る限り「何でか？」というのも一緒に覚えてみようと思います。

また、以下（9）の下線部に示されるように、

- (9) 母語獲得の強力なメカニズムである言語獲得装置は、脳が可塑性を持つために年齢とともにその機能を退化させていき、別の目的に再利用されていく可能性が高い。そのため、成人の外国語習得に際しては、生得的な言語獲得装置を十分に利用することができないと考えるべきであろう。

— 竹内（編）（2000：140）（下線筆者）

大脳内に存在する言語獲得装置の生得的な側面にのみ着目するばかりではなく、母語話者が自身の経験を基に語の「概念」を如何にして習得しているのかというメカニズムを明らかにし、その言語獲得装置の後天的な側面を活用することが不可欠ではないかと考えられる。こうした考えを第二言語の具体的な学習指導に反映させ得る手段の一つが、「投影 (proyección)」であると考え。そこで、以下では、「投影 (proyección)」活動をその一例として活用することで、スペイン語学習者の自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た「日常経験」に自然に即した新しい学習指導内容の一端を明示する。

## 2. スペイン語における投影活動

古来より人はあらゆる物に名前をつけ、互いに意志伝達を行ってきた。現代のように新しい物が溢れる時代になればなるほどそれらにつける名前は増えていくことになるが、何も全ての物に新しい単語を創り出すのではなく、既存の単語を利用して効率よく名前をつける活動が行われてきた。このような見地に立脚すれば、例えば以下 (1) に見られるような記載においても、

- (1) **ratón, na** [ˈɾatón, na]

名《動物》ハツカネズミ

— 『現代スペイン語辞典』(s.v. ratón, na, n)

学習者は英単語のつづりとその日本語訳を機械的に丸暗記する無益な労力を必要とせず、自身の身近な日常経験から習得することが可能となる。なぜなら、以下 (2) に見られるように、

- (2) **ratón, na** [ˈɾatón, na]

名《動物》ハツカネズミ

◆ 男《情報》マウス

— 『現代スペイン語辞典』(s.v. ratón, na, n)（下線筆者）

パソコンの周辺機器の一つである「マウス」も同じ ratón で表されるからであり、その意味変化のトリガー (gatillo) となるのが「姿・形」あるいは「動作」の酷似である。それ故、次の (3) に描かれるような図を用いて、視覚を通じた指導を行えば、より一層の習得効果が期待されるのは言うまでもない。

(3) ratón : ハツカネズミ



{ 姿・形（丸みを帯びた体型と長い尻尾のようなコード）  
動作（ちょこまかと動き回る） } の酷似

↓  
ratón : (パソコンの周辺機器の一つである) マウス



このような「或る対象物を表すために自分が知っている物の姿・形を利用する活動」を「投影 (proyección)」と言う。そして、我々人間にとってその最も身近な物とは自身の「身体」に他ならない。例えば、次の(4) - (5) に示されるように、日本語や英語では「山」は人の姿・形に見立てられていることが観察される：

(4) あたまを雲の上に出し

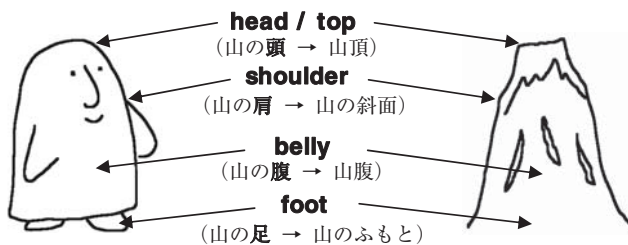
四方の山を見おろして

かみなりさまを下に聞く

ふじは日本一の山

— 童謡『ふじの山』より

(5)



— 森山・高橋・福森 他 (2010: 17)

言語（表現）という「容器」そのものは相異なっているとしても、それを使用するのは「人間」という同じ生物であり、自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た経験こそが「人間の本質の産物」に他ならない。そのため、そこには言語の枠を超えた人間が普遍的に持つ「共通のものの見方」が存在すると考えられる。下記(6)がその詳細である。

(6) Each such domain[ = a basic domain of experience] is a structured whole within our experience that is conceptualized as what we have called an *experiential gestalt*. Such gestalts are experientially basic because they characterize structured wholes within recurrent human experiences. They represent coherent organizations of our experiences

in terms of natural dimensions (parts, stages, causes, etc.). Domains of experience that are organized as gestalts in terms of such natural dimensions seem to us to be *natural kinds of experience*.

They are *natural* in the following sense: These kinds of experiences are a product of

Our bodies (perceptual and motor apparatus, mental capacities, emotional makeup, etc.)

Our interactions with our physical environment (moving, manipulating objects, eating, etc.)

Our interactions with other people within our culture (in terms of social, political, economic, and religious institutions)

In other words, these “natural” kinds of experience are products of human nature. Some may be universal, while others will vary from culture to culture.

(そのような各々の領域 [= 基本的領域の経験] は我々の経験の内部で構造化される全体であり、今まで述べてきた「経験のゲシュタルト」として概念化されるものである。そのようなゲシュタルトは、繰り返された人間の経験内部で構造化された全体を特徴付けることから、「経験的に基本的なもの」である。それらは、自然な相 (例えば、部分、段階、因果関係など) の観点から、我々の経験を一貫して組織化することを示している。そのような自然な相の観点からゲシュタルトとして組織化される経験の相は我々にとって「自然な種類の経験」のように思われる。

それらは以下の意味において「自然」である: この種の経験は以下のものから生じる。

我々の肉体 (知覚及び運動神経器官, 知的能力, 感情の気質等)

物理的環境との相互作用 (移動, 物体の操作, 食行為等)

(社会的, 政治的, 経済的, そして宗教的状况内の観点からの) 同一文化内における他の人々との相互作用

換言すれば、これらの「自然な」種類の経験は「人間の本質の産物」なのである。それらの経験の或るものは普遍的かもしれない一方、他のものは文化によって異なる場合もあるかもしれない。

— Lakoff and Johnson (1980 : 117-118) (下線・[ ] 内表記・日本語訳筆者)

こうした「自然な種類の経験」から得られる「共通のものの方」が存在するという考えに基づけば、次の (7) にも見られるように、スペイン語母語話者の無意識的意識においても同様の概念化が成されても何ら不可思議なことではない。

- (7) …cual si obedeciésemos a simpatía misteriosa, prestamos al mundo que nos rodea los atributos de nuestra propia personalidad, y vemos en el monte *cabeza*, *ceja*, *garganta*, *pie* y *falda*, y damos al río *brazos*, y *boca* y *madre*…

(…まるで神秘的な共鳴に従っているかのように、我々を取り巻く世界に我々の特性自体の属性を貸し与えている。だから、山 (monte) には「頭 (*cabeza*)」, 「眉 (*ceja*)」, 「喉 (*garganta*)」, 「足 (*pie*)」そして「裾 (*falda*)」が見られ、川 (río) には「腕 (*brazos*)」,



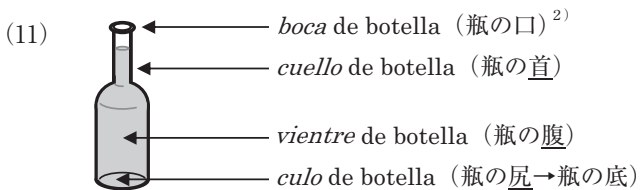
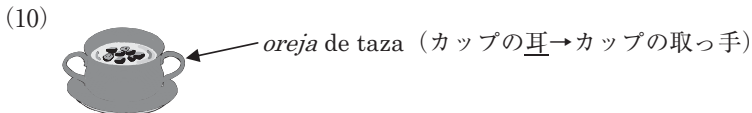
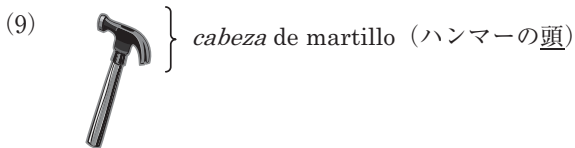
また「口 (*boca*)」や「母 (*madre*)」が用いられる…

— DCR (1886: xiv) (下線・日本語訳筆者)

さらに言えば、ここに「山は人である (*UNA MONTAÑA ES UNA PERSONA*)」とも言えるメタファー (*metáfora*)<sup>1)</sup> が働いているからこそ、以下 (8a-c) のような表現も可能となるのである。

- (8) a. *conquistar la montaña* (山を征服する)
- b. *luchar contra la montaña* (山と戦う)
- c. *resultar muerto por la montaña* (山に殺される)

このような「人の姿・形に基づいた投影」活動は何も「山」に対してだけに行なわれるとは限らない。下図 (9) - (11) に代表されるように、



人間は少しでも自分に似ているものには、自身の身体部位の姿・形を投影し、新しい語を創らず既存の語を使うことで「最小の言語表現で最大の外界表示を行おうとする」非常に理知的な動物であると言える<sup>3)</sup>。

そして、「形状、役割に基づいた投影」活動の一例が下記 (12) である。



また、「ニンニクの玉」はスペイン語では以下 (13) のように、

(13) *cabeza de ajos* (ニンニクの頭→ニンニクの玉)







身体部位の一つである「頭 (*cabeza*)」を用いて表現されるが、そこから取り出した「1 かけらのニンニク」は次の (14) に見られるように「歯 (*diente*)」を用いて表現される。

(14) *un diente de ajo* (ニンニクの歯→ニンニク 1 かけ)



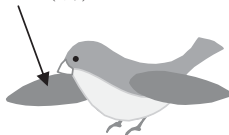
つまり、上記 (13) - (14) の表現は、単にその「姿・形」を投影しているにとどまらず、「部分と全体」の関係という類似点にも着目していると言える。これを以下 (15) にまとめる。

(15)

全 体	部 分
<p><i>cabeza de ajos</i> (ニンニクの頭→ニンニクの玉)</p> 	<p><i>un <u>diente</u> de ajo</i> (ニンニクの歯→ニンニク 1 かけ)</p> 
<p><i>cabeza</i> (頭)</p> 	<p><i>diente</i> (歯)</p> 

こうした「投影」活動は、何も人間だけに見立てるばかりではない。当然のことながら、上出 (3) でも観察したように、我々の生活において身近なものであればその物の姿・形はしばしば利用される。例えば、「(帽子の) つば, 縁」はそれぞれ *ala* と表現されるが、こうした表現は「帽子」を「鳥」に見立てていることに由来する。これを以下 (16) に示す。

(16) *ala* (羽)

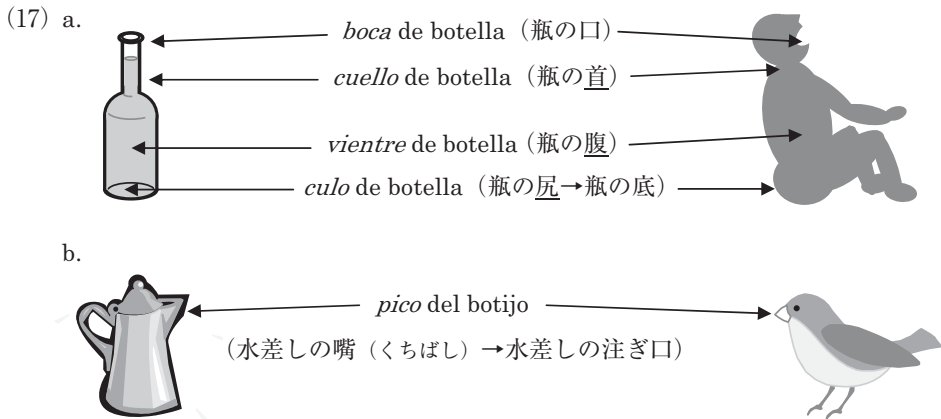


*ala del sombrero* (帽子の羽→帽子のつば)

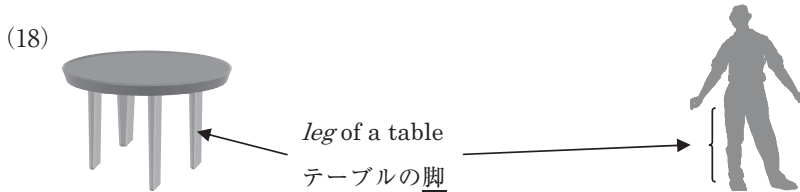


また、上出 (11) で見たように、「瓶の口」を表すのに「人間の口」を意味する *boca* が用いられるのに対し、同じ「物の開口部」であっても、「水差しの口」を表す場合には「(鳥の嘴 (く

ちばし))を意味する *pico* が用いられる。これは、「瓶 (*botella*)」を「(尻について座っている)人間の姿・形」に見立てているのに対し、「水差し (*botijo*)」の場合には、「口の先が尖っている」、「取っ手が鳥の羽のように見える」といった形状に焦点を当てることで、「水差し」を「鳥の姿・形」に見立てていることに起因する<sup>5)</sup>。これを以下 (17) にまとめる。



さらに、次の (18) に見られるように、



日本語や英語では、「テーブルの脚 (*leg of a table*)」を表すために、人間の「脚 (*leg*)」を用いて表現する。他方、スペイン語では、*pata* という語が用いられるが、これは「人間の脚」ではなく、下記 (19) に見られるように、「動物の脚」を意味する語である。

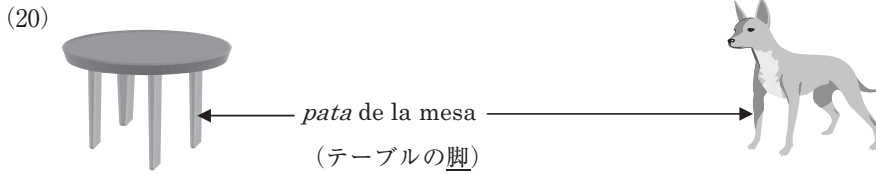
(19) *pata* [パ・タ] 女 [動物や机などの] 脚 :

**El gato tiene una *pata* blanca.**

その猫は脚が一本白い。

— 高橋 (2006 : 178)

つまり、典型的なテーブルや椅子の脚は通常 4 本であることから、通常 2 本である「人間の脚」ではなく、通常 4 本である「動物の脚」を用いているのである。この点で、「テーブルの脚」に関しては、英語や日本語よりもスペイン語の方がよりその姿・形を忠実に投影していると言える。これを以下 (20) にまとめる<sup>6)</sup>。



### 3. まとめ

本稿では、人間の姿・形が外界の対象物を把握するために利用される「投影」活動を観察することで、我々人間が外界世界を如何にして捉えているかについて、その一端を論述した。これらの事実からも支持されるように、語彙指導を行う上で最も注目すべきことの一つは言葉の背景に潜む人間の認識であり、その顕著な知的メカニズムの一つである「投影」活動を明らかにしてスペイン語の語彙学習・指導に活用すれば、これまで機械的な丸暗記に依存するしか術（すべ）がなかった語彙指導に飛躍的な進歩が期待される。最後に、身体性に重点を置いた経験主義の立場に立脚してこれまで詳述してきたことを、実際の本の形式化で明示した一例を稿末で提示することにより、和訳偏重主義への抜本的改革を願って本稿を結ぶことにする。

### 注

1) (→ p. 205)

「メタファー」は伝統的哲学及び文学においては詩的空想力が生み出す修辭的な文飾の技巧（例：brave like a lion ライオンのように勇敢な／as cool as cucumber 全く冷静な／silence is good 沈黙は金、等）として見なされてきた（Cf. Lakoff and Johnson (1980: 3-6), (1999: 3-8)）。しかしながら、ここで言うメタファーとはそのような言葉の綾を指すのではない。それどころか、下記 [1] に見られるように、我々の概念体系の大部分がメタファーによって成り立っており、日常生活のあらゆる営みの根本を成すものだと言える。

[1] We have found...that metaphor is pervasive in everyday life, not just in language but in thought and action. Our ordinary conceptual system, in terms of which we both think and act, is fundamentally metaphorical in nature.

(メタファーは、言語のみならず思考や行動に至るまで、日常生活の中に浸透している…ことがわかる。我々の普段の概念体系は、それによって我々は考えたり行動したりするのだが、根本的にメタファーによって成り立っている。)

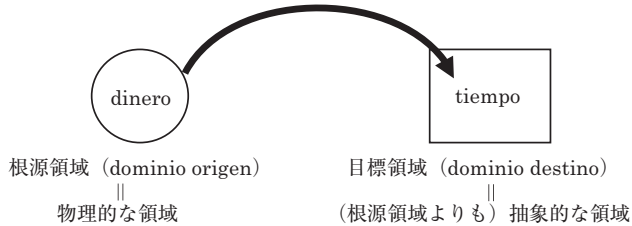
— Lakoff and Johnson (1980: 3) (一部省略・日本語訳筆者)

たとえば、次の [2] が示すように、

[2]  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Gasté} \\ \text{Perdí} \\ \text{Invertí} \end{array} \right\}$  mucho  $\left\{ \begin{array}{l} \text{dinero} \\ \text{tiempo} \end{array} \right\}$  en esa empresa.  
 (私はその事業に多くの  $\left\{ \begin{array}{l} \text{お金} \\ \text{時間} \end{array} \right\}$  を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{費やした} \\ \text{無駄にした} \\ \text{投資した} \end{array} \right\}$ 。)

ここでは、視覚でも触覚でも捉えられない抽象的な目標領域 (dominio destino) である 'tiempo' の指示物を認識するために、'dinero' という具体的な指示物が根源領域 (dominio origen) として利用され、'tiempo' の指示物の一面に光が当てられていると言える。換言すれば、「限りある貴重な資源」という概念を共通項とした「時はお金である (TIEMPO ES DINERO)」メタファーが貨幣社会に生きる我々の概念体系に存在し、それがトリガー (gatillo: 引き金) となって具体的な根源領域からそれよりも抽象的な目標領域に概念が転移しているのである。これを以下に [3] として図示する。

- [3] 「時はお金である (TIEMPO ES DINERO)」メタファーのメカニズム  
 トリガー (gatillo: 引き金): 「限りある貴重な資源」



したがって、下記 [4] に見られるように、

- [4] Perhaps the most important thing to stress about grounding is the distinction between an experience and the way we conceptualize it. We are not claiming that physical experience is in any way more basic than other kinds of experience, whether emotional, mental, cultural, or whatever. All of these experiences may be just as basic as physical experiences. Rather, what we are claiming about grounding is that we typically conceptualize the nonphysical in terms of the physical – that is, we conceptualize the less clearly delineated in terms of the more clearly delineated.

(…概念基盤の形成について強調すべき最も重要なことは、おそらく、経験と、経験の概念化の仕方を明確に区別しておくことであろう。我々はここで肉体上の経験が、感情的な経験であれ、知的な経験であれ、文化的な経験であれ、その他の種類の経験よりもいかなる点においてもより基本的なものだと主張しているわけではない。肉体上の経験と同様に、それらの経験も全て同じように基本的な経験と言ってよいだろう。むしろ、我々筆者が概念基盤の形成について主張したいことは、我々は常に肉体的なものを基盤にして非肉体的なものを概念化しているということである—すなわち、より明確な輪郭を持つものの観点から、より不明確な輪郭を持つものを概念化しているということである。)

— Lakoff and Johnson (1980: 59) (下線・日本語訳筆者)

我々の概念体系の根本を成すメタファーは、自身にとって最も身近な存在である肉体的なものを基盤にして非肉体的なものを捉え、より明確な輪郭を持つものを基盤にしてより不明確な輪郭を持つものを認識するための比喩のフィルターとして機能しているのである。

2) (→ p. 205)

以下 [1] に示されるように、

- [1] **boca abajo [arriba]** うつぶせ [あお向け] に：  
 Está acostado boca abajo. 彼はうつぶせに横たわっている。

— 高橋 (2006: 33)

人間が「うつ伏せになる」または「仰向けになる」ことを身体部位 boca を用いて、それぞれ「口 [boca] を下に [abajo] 向ける」「口 [boca] を上に [arriba] 向ける」と表される。ここで、「コップを伏せる」という表現も、次の [2] に見られるように、

- [2] コップを伏せる  
 poner un vaso boca abajo  
 —『和西辞典』(s.v. 伏せる【伏せる】)

「口 [boca] を下 [abajo] にしてコップ [un vaso] を置く [poner]」と表現できるのも、次記 [3] に示されるように、

- [3] boca de vaso (コップの口)

何らかの物が出入りする「物の開口部」がしばしば「人間の口」に見立てられることに起因する。

3) (→ p. 205)

スペイン語 *ojo* (目) の投影表現に関する詳細な研究については三好 (2009, 1010) 参照。また、日本語「目」の投影表現に関して詳しくは李 (2002) 参照。

4) (→ p. 205)

下記 [1] から明らかなように、そもそも、クレーンを意味する *grúa* 自体が、「鶴の姿・形」の投影表現である。

[1] ← [カタルーニャ] *grua* (原義は「鶴(つる)」); 形の類似による転義; 同源の [英] *crane* にもこの2義がある)

— 『西和中辞典』 (s.v. *grúa, n.*) (下線筆者)

なお、上記記載には「形の類似による転義」のみが指摘されているが、そこには「鶴の餌を食べる動作」と「クレーンの物を持ち上げる動作」という「動作の類似による転義」も、その意味拡張の大きな要因として挙げることができる。

5) (→ p. 207)

事実、ポルトガル語では「(鳥の) 嘴(くちばし)」は *bico*、「(鳥の) 羽」は *asa* というが、「(水差しなどの) 注ぎ口」を *bico* と表現するだけでなく、「取っ手」のことも *asa* と表現する。

また、ポルトガルには、上述の投影活動を利用した以下 [1] に示す *なぞ* *なぞ* が存在する。

[1] Qual é coisa?

Qual é ela que tem asas mas não voa?

E que tem bico mas não debica?

(何でしょう?)

*asa* があるのに飛ばず、

*bico* があるのに突かないものは何でしょう?)

6) (→ p. 207)

各国の表現に目を向けると、泳げない人のことは以下 [1a-h] のように表現される。

- [1] a. [英語] He swims like a stone. (彼は石のように泳ぐ)  
 b. [スペイン語] Él nada como un pez de plomo. (彼は鉛の魚のように泳ぐ)  
 c. [フランス語] Il nage comme un chien de plomb. (彼は鉛の犬のように泳ぐ)  
 d. [イタリア語] Lui nuota come un gatto di piombo. (彼は鉛の猫のように泳ぐ)  
 e. [中国語] 他是个旱鸭子。(彼は陸(おか)のアヒルだ)  
 f. [ポルトガル語] Ele nada como um prego. (彼は釘のように泳ぐ)  
 g. [日本語] 彼は金鎚だ。  
 h. [韓国語] 그는 맥주병이다. (彼はビール瓶だ)

上記 [1a-h] の表現は全て「水に沈む」という点が共通しているが、スペイン語 (*un pez de plomo*)、フランス語 (*un chien de plomb*)、イタリア語 (*un gatto di piombo*) および中国語 (旱鸭子) の場合は、「本来は泳げるはずのものが沈んでしまう」という点が「単に水に沈む」ことを表す英語 (*a stone*) の場合とは異なっている。また、日本語 (金鎚) とポルトガル語 (*um prego*) の場合は、「頭の部分があり、細長い形をしている」という点も人間に見立てた表現になっている。さらに、韓国語 (맥주병) の場合は、「口、首、肩、胴の部分があり、細長い形をしている」という形状の点ばかりでなく、「口から泡を出しながら沈んでいく」という点もよく見立てられていると言える。

## 参考文献

Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. London, New York: Longman. (中右実 (訳) (1981) 『意味と

形』こびあん書房.)

Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*. Studia memoriae Nicolai van Wijk dedicate Series minor 4. The Hague. Mouton. (勇康雄 (訳) 『文法の構造』 研究社.)

Cuenca, Maria Josep & Joseph Hilferty (1999) *Introducción a la Lingüística Cognitiva*. Madrid : Ariel Lingüística.

Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡辺昇一 (訳) (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店.) (Marín, Carmen González (trad.) (1986) *Metáforas de la Vida Cotidiana*. Madrid : Cátedra.)

Lakoff, George & Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York : Basic Books.

Real Academia Española (= RAE) (1999) *Gramática Descriptiva de La Lengua Española*, Tomo. 1-3, Madrid : Editorial Espasa Calpe.

Ungerer, Friedrich & Hans-Jörg Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman. (池上嘉彦 他 (訳) (1998) 『認知言語学入門』 大修館書店 : 東京.)

上野景福 (1955) 『語形成』 (英文法シリーズ 25) 研究社.

上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知言語学的アプローチ —』 英宝社.

河上誓作 (編) (1996) 『認知言語学の基礎 — An Introduction to Cognitive Linguistics』 研究社.

森山智浩・高橋紀穂・福森雅史 他 (2010) 『英語前置詞の概念 — 認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化の学際的観点から —』 (FD 語学教育改革シリーズ 1) ブイツーソリューション.

高橋覚二 (2006) 『もっと使える 基本のスペイン単語』 白水社.

竹内理 (編) (2000) 『認知的アプローチによる外国語教育』 松柏社.

福森雅史 (2007) 『異言語間における動作主導前置詞の概念研究 — スペイン語・ポルトガル語・英語を通して —』 (大阪大学言語社会学会博士論文シリーズ Vol. 42) 大阪大学言語社会学会.

堀田彰 (1991) 『人と思想 6 アリストテレス』 清水書院.

三好準之助 (2009) 「多義語「目」と 'ojo' の日西対照研究」 *HISPÁNICA*, 53, pp. 41-60, 日本イスパニヤ学会.

三好準之助 (2010) 「「台風の日」と ojo del huracán : 日西比較研究」 『京都産業大学論集 (人文科学系列)』 41, pp. 1-21, 京都産業大学.

李潤玉 (2002) 「人間の「目」の意味転位を司る投射メカニズム」 上野義和・森山智浩・入学直哉・李潤玉 『認知意味論の諸相 — 身体性と空間の認識』 pp. 99-136, 松柏社.

#### 【辞書・辞典】

[DCR] : Ruginó José Cuervo (ed.) (1886) *Diccionario de Construcción y Régimen de La Lengua Castellana*. Barcelona: Editorial Herder.




桑名一博 他 (編) 『西和中辞典』 小学館.

小西友七・南出康生 (編) (2002) 『ジーニアス英和大辞典』 大修館書店.

寺澤芳雄 (編) (1999) 『英語語源辞典』 研究社.

山田善郎 他 (編) (2004) 『現代スペイン語辞典』 (改訂版) 白水社.

山田善郎 他 (編) (2004) 『和西辞典』 (改訂版) 白水社.

cabeza	頭
<input checked="" type="checkbox"/> <b>cabeza de cerilla</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>cabeza de clavo</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>cabeza de martillo</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>cabeza de espárrago</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>cabeza de nuclear (atómica)</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>cabeza de ajos</b>  <input checked="" type="checkbox"/> <b>una cabeza de lechuga</b>	マッチの頭 釘の頭 ハンマーの頭 (アスパラガスの頭)→ アスパラガスの先 (核の頭)→ 核弾頭 (ニンニクの頭)→ ニンニクの玉 ◎ 「ニンニク1かけら」は <b>un diente de ajo</b> (ニンニクの歯1つ)と表現する。 (レタスの頭1つ)→ レタス1玉  
cara	顔・面
<input checked="" type="checkbox"/> escribir por { una sola <b>cara</b> / las dos <b>caras</b> } del papel <input checked="" type="checkbox"/> <b>cara</b> { visible / oculta } de la Luna <input checked="" type="checkbox"/> escalar la <b>cara sur</b> de la montaña <input checked="" type="checkbox"/> ¿ <b>Cara o cruz</b> ?  <input checked="" type="checkbox"/> seis <b>caras</b> de un cubo	紙の { 表の面だけ / 両面 } 書く (月の { 見える / 隠れた } 面)→ 月の { 表側 / 裏側 } (山の南の面を登る)→ 山の南壁を登る 〈硬貨を投げて〉「(顔か十字架か?)」→ 表か裏か? ◎ 硬貨の「表面」には肖像画が、「裏面」には十字架が描かれていたことに由来する。 立方体の6面
ojo	目
<input checked="" type="checkbox"/> <b>ojo de la cerradura</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>ojo de gallo [de pollo]</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>ojo de pez</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>ojo de aguja</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>ojo del tifón [de huracán]</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>ojo de queso</b>	(鍵の目)→ 鍵穴 (雄鶏の[若鶏の]目)→ (足の)たこ, 魚の目 (魚の目)→ 魚眼レンズ (針の目)→ 針穴 台風の[ハリケーンの]目 (チーズの目)→ チーズのガス孔
oreja	耳
<input checked="" type="checkbox"/> <b>oreja de taza</b>	(カップの耳)→ カップの取っ手 



boca	口
<input checked="" type="checkbox"/> boca de botella	瓶の口
<input checked="" type="checkbox"/> boca de barril	樽の口
<input checked="" type="checkbox"/> boca de horno	炉(かまど)の口
<input checked="" type="checkbox"/> boca de fusil	銃口
<input checked="" type="checkbox"/> boca de metro [puerto, túnel, canal, calle]	(地下鉄[港, トンネル, 運河, 通り]の口) → 地下鉄[港, トンネル, 運河, 通り]の入り口
<input checked="" type="checkbox"/> boca en la suela de una bota	(長靴の底の口)→ 長靴の底の穴
<input checked="" type="checkbox"/> vasija de boca { ancha estrecha }	{ 広い } { 狭い } 口の容器
<input checked="" type="checkbox"/> poner un vaso boca abajo	(口を下にコップをして)→ コップを伏せる
<input checked="" type="checkbox"/> boca del estómago	(腹の口)→ 鳩尾(みぞおち) ◎ 鳩尾(みぞおち)のくの字にへこんだ形が、口を横から見た形と似ていることから。

diente	歯
<input checked="" type="checkbox"/> dientes de sierra	鋸(のこぎり)の歯
<input checked="" type="checkbox"/> un diente de ajo	ニンニク 1 かけ ◎ 「ニンニクの玉」は <b>cabeza de ajo s</b> (ニンニクの頭)と表現する。
<input checked="" type="checkbox"/> dientes de león	(ライオンの歯)→ タンポポ ◎ 「タンポポの葉」のギザギザした様がライオンの歯( <b>dientes de león</b> )に似ていることから。



cuello	首
<input checked="" type="checkbox"/> cuello de botella	瓶の首



brazo	腕
<input checked="" type="checkbox"/> brazo de grúa	クレーンの腕 ◎ クレーンを意味する <b>grúa</b> 自体が、「鶴の姿・形」の投影表現。
<input checked="" type="checkbox"/> brazo de la cruz	(十字架の腕)→ 十字架の横木
<input checked="" type="checkbox"/> brazo de molino	(風車の腕)→ 風車の羽根
<input checked="" type="checkbox"/> brazo de río	(川の腕)→ 川の支流




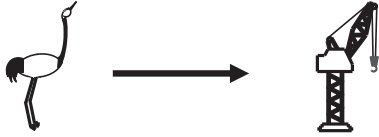
pie	足
<input checked="" type="checkbox"/> <b>pie de una lámpara</b>	(電気スタンドの足)→ 電気スタンドの下部
<input checked="" type="checkbox"/> <b>a pie de página</b>	(ページの足)→ ページの下部
<input checked="" type="checkbox"/> <b>al pie de la montaña</b>	(山の足)→ 山の麓(ふもと)
<input checked="" type="checkbox"/> <b>al pie de la escalera</b>	(階段の足)→ 階段の下で

人の姿・形に基づいた投影表現

<input checked="" type="checkbox"/> <b>boca de botella</b>	瓶の口
<input checked="" type="checkbox"/> <b>cuello de botella</b>	瓶の首
<input checked="" type="checkbox"/> <b>vientre de botella</b>	瓶の腹
<input checked="" type="checkbox"/> <b>culo de botella</b>	(瓶の尻)→瓶の底



身近なものに姿・形を見立てた投影表現

<input checked="" type="checkbox"/> <b>ratón</b>	<p>(パソコンの周辺機器の一つである)マウス</p> <p>◎ <b>ratón</b> は本来「ハツカネズミ」の意。「丸みを帯びた体型と長い尻尾のようなコード」という姿・形や「ちょこまかと動き回る」という動作が類似していることから。</p> 
<input checked="" type="checkbox"/> <b>grúa</b>	<p>クレーン</p> <p>◎ 「鶴」を原義とするカタルーニャ語 <b>grua</b> から。鶴の「長い首」とクレーンの「長い腕」という「形の類似」だけでなく、鶴の「餌を食べる」とクレーンの「物を持ち上げる」という「動作の類似」も、「クレーン」を「鶴」に見立てる大きな要因となった。</p> 

身近なものに姿・形を見立てた投影表現

☑ **cigarro**

葉巻

- ◎ 「セミ」を意味するスペイン語 **cigarra** から。セミの姿・形と葉巻のそれとが類似していることから。但し、「喫煙する」を意味するマヤ語 **sik'ar** に由来するとする説もある。



☑ **ala del sombrero**

(帽子の羽) → 帽子のつば

- ◎ 帽子のつばが大きく横に張り出している様子を鳥が羽を大きく横に広げている様に見立てた表現。



☑ **pico del botijo**

(水差しの嘴(くちばし)) → 水差しの注ぎ口

- ◎ 「先が尖っている」という「注ぎ口」の形が「鳥の嘴」の形と類似していることから。



☑ **pata de la mesa**

テーブルの脚

- ◎ **pata** は「動物の脚」を表す。テーブルや椅子は通常 4 本足であることから、通常 2 本である「人間の脚」ではなく、通常 4 本である「動物の脚」を用いている。



